

ベーシック・エンカウンター・グループのファシリテーター養成における「コ・ファシリテーター方式」の意義：「ちがい」に着目して

内田, 和夫
九州大学大学院人間環境学府

野島, 一彦
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/891>

出版情報：九州大学心理学研究. 4, pp.75-81, 2003-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：



ベーシック・エンカウンター・グループのファシリテーター養成における「コ・ファシリテーター方式」の意義 —「ちがい」に着目して—

内田 和夫 九州大学大学院人間環境学府
野島 一彦 九州大学大学院人間環境学研究院

The significance of “co- facilitator method” in the facilitator training for basic encounter group —Discussion of the “difference”—

Kazuo Uchida (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)
Kazuhiko Nojima (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

This paper is a case study on a trial of facilitator training for basic encounter group by “co- facilitator method”. A facilitator and a co- facilitator facilitated a basic encounter group (3 nights, 4 days, 9 sessions, 25 hours, 9 members). We described the structure and the process of this group. And we discussed the significance of “co- facilitator method” for members, facilitator and co- facilitator. Finally, we pointed out the significance of “co- facilitator method” in the facilitator training for basic encounter group. And it was indicated that differences between facilitator and co- facilitator were available for understanding and facilitating group process.

Keywords: co- facilitator method, difference, basic encounter group

はじめに

近年、臨床心理士という職業が広く知られるようになり、その社会的なニーズが急速に増大している。そして、臨床心理士に期待される活動のなかでもグループ・アプローチは、現実場面への近さや経済性、そして特有の効果的要因(野島, 1999)ゆえに、教育、医療、福祉、産業など幅広い領域においてとりわけニーズが高いものであり、したがって良質なグループ・アプローチを提供しうる臨床心理士の養成は急務である。

ところで、一口にグループ・アプローチといっても、そこにはグループ・サイコセラピーやグループ・カウンセリング、心理劇、Tグループなど、目的や方法の様々なものが含まれる。そのなかでも、筆者らは、エンカウンター・グループ(Encounter Group)の経験が各種グループ・アプローチの基礎となりうるものであると考えて、エンカウンター・グループのファシリテーター(facilitator)養成に力を入れ、実践と研究(例えば、野島・内田, 2001)を積み重ねてきた。

さて、ファシリテーターの養成方法にも様々なものがあるが、そのひとつに「コ・ファシリテーター(co-facilitator)方式」がある(野島, 1985)。これは、研修生がコ・ファシリテーターとして、ベテランのファシリテーターと共同して実際のグループに臨むものである。1970年代以降その実践は多くなされ、近年その有効性を

指摘する研究もみられるようになった。例えば、福田・野島(2002)は、ベーシック・エンカウンター・グループ(Basic Encounter Group)におけるコ・ファシリテーター体験について事例研究的検討を行い、ファシリテーター養成におけるこの方式の有効性を示唆している。しかし、ファシリテーターが単独で行う場合に比べて、未熟ながらもファシリテーターの役割を担った一人のちがう人間が加わるということは、研修生だけではなく、メンバー及びベテランのファシリテーターにも益するところがあると考えられる。そのような部分まで踏み込んだ議論を行うことは、ファシリテーターの養成方法やファシリテーション技法を洗練していく上でも意義深いことである。そこで本稿では、「コ・ファシリテーター方式」にて実施されたベーシック・エンカウンター・グループの事例を、ファシリテーターとコ・ファシリテーターの「ちがい」に着目しながら呈示し、メンバー、ファシリテーター、コ・ファシリテーターそれぞれにとっての本方式の意義について考察する。

グループ構成

1. グループの位置づけ

本稿で呈示するグループは、某看護学校の2年生を対象に、集中宿泊形式(3泊4日:9セッション、計25時間)にて実施された研修型ベーシック・エンカウンター・グループである。なお、本グループの他に3つのグループ

プが並行して進行した。

2. 場所

学校から車で3時間ほど離れたところにある宿泊研修施設の一角(10畳の和室)が使われた。メンバーは学校のバスでやって来た。

3. グループ編成

本グループのメンバーは9名(全員女性, 20~21歳, 本文中ではA子~I子と表記, エンカウンター・グループの経験があるものはいない), ファシリテーターは野島(50代男性, 大学教員, エンカウンター・グループのメンバー経験及びファシリテーター経験は多数回), コ・ファシリテーターは内田(20代男性, 大学院生, エンカウンター・グループのメンバー経験は複数回あるが, ファシリテーターは初めて)であった。

4. スケジュール

1日目は, 13時30分~15時がオリエンテーション, 15時~17時が第1セッション, 19時~22時が第2セッション。

2日目は, 9時~12時が第3セッション, 14時~17時が第4セッション, 19時~22時が第5セッション。

3日目は, 9時~12時が第6セッション, 14時~17時が第7セッション, 19時~22時が第8セッション。

4日目は, 9時~11時が第9セッション, 11時~12時が全体会。

なお, 4つのグループのファシリテーターとコ・ファシリテーターは, 各セッション終了後, 別室に集合してミーティングを行った。

5. リサーチ

メンバーはグループ経験前後の「参加者カード」, 毎セッション後の「セッション・アンケート」への記入が求められた。それぞれ自由記述にて感想が求められるほか, 前者には意欲度と期待度, 後者には魅力度についての7件法(1~7)による質問項目が設けられた。

経 過

経過の記述に際して, ファシリテーターを fac., コ・ファシリテーターを co. とそれぞれ略して表記する。なお, < > は fac. 及び co. の発言を, 「」はメンバーの発言をそれぞれ示している。

●オリエンテーション 1日目 13時30分~15時

オリエンテーションでは, 参加者カードへの記入, グループについての説明とファシリテーターの自己紹介に引き続いて, グループのメンバーの発表, ファシリテ

ーターとの組み合わせ, 部屋決めが行われた。最後にグループごとに写真撮影が行われた。

・メンバーの意欲度平均=4.00 (SD=1.05), 期待度平均=4.22 (SD=0.79)

・fac. の意欲度=6, 期待度=6, co. の意欲度=5, 期待度=5

●第1セッション 1日目 15時~17時

fac.<何をやっていくか話し合っ決めていければ。fac.もグループの11分の1であり, 11分の1の権利と責任をもって関わる>という導入発言, 自己紹介に続いて, <どのようにしていきたいか>と尋ねた。するとメンバーは「水泳……テニス……散歩」と小声でこそこそと話し合い, そのうち「テニスがいいです」と。これに対して, fac.<みなさんがどんな人か分からないのにそう言われても……戸惑っています。ついていけない感じがする>と, やや憤りを込めて発言した。グループに緊張が走り, メンバーはしばらくキョロキョロと目を見合わせて, そのうち fac. のとなりから順繰りに自己紹介が始まった。2人目まで fac. が細やかに質問を挟みつつ聴いていると, 3人目から看護婦の志望動機, 性格について話す流れができた。志望動機としては, 「看護婦の母や姉の姿を見て」, 「役に立ちたい」, 「手に職を」, 「人と接するのが好きだから」, といったものであった。性格については, 「自分を表現できない」, 「嫌われたくない」, 「傷つけ傷つけられたくない」, 「忙しくてストレスが溜まっている」, 「看護に向いてないのではないか」, 「自分を変えたい」, などであった。初回であるにもかかわらず, 表面的でない話が展開した。

・メンバーの魅力度平均=5.78 (SD=0.79)

・fac. の魅力度=5.5, co. の魅力度=6

●第2セッション 1日目 19時~22時

冒頭, メンバーは落ち着きなく目を見合わせていた。fac.<空白を埋めるために追われるように話すのではなく, 地に足が着いた形でやっていきたい。>

話題は「息抜き」について。fac. の<アクションもののビデオを見る, 車を飛ばすこと>から順繰りに話していった。メンバーに共通するのは「学校から離れる」ということであった。第1セッションでの緊張, 自己開示から, 「息抜き」について話すことでまさに息抜きをしているようであった。

休憩を挟んで話題は「沈黙」について。沈黙が嫌だという者が多い。co.<休憩のときに『何を話そうか?』と言っていたけど, それをここで話すというのも一つの手かな。沈黙でもいいのだけれども。>fac.<内田君のを聞いて沈黙の中で思ったのは, 話さなければと義務感で話すのはどうかと思う。話したいことを話せたら。>

A子「休憩に何がしたいか話し合った。外に出て体を動かしたい。」fac.<それも一つの案ですね。それからさっ

き内田君が言ったのも。>A子「別に普通のことでも。例えばむかつく事とか、嬉しい事とか。」fac.が賛意を示し、むかつく事について話し合うことになった。A子「いろんなことでむかついているから、これということは思い浮かばない。」クラスの教育委員のB子は、課題の提出が遅い人に対する不満、その人に何も言えない事への不満などを語った。おなじ教育委員のC子「私がB子を助けてあげないといけない。でも私が同じ立場だったらおなじように言えない。」そこで時間となり、fac.<未消化な感じなので改めて>ということを終了。

・メンバーの魅力度平均=4.67 (SD=1.15)

・fac.の魅力度=5, co.の魅力度=5

●第3セッション 2日目 9時~12時

冒頭、15分ほど沈黙。co.<いつもと違うところに来て、黙っていても心は動いていて、今はくたびれているなあという感じ。そう思ってから言おうか言うまいかドキドキしていた。>A子「私も言おうかどうしようか迷ったけど、やっぱり外に出たいと思う。」fac.<他の人はどんなことを沈黙の間に感じていた？>すると皆口を揃えて「前ほど沈黙は嫌じゃなかったけど、やっぱり外に出たい。」D子「この部屋にいるのが嫌。いろんな気持ちがあっとうまく言えないけど。」E子「このセッションの前にみんなで外に出たいねって話していて、でもそれを言ったら昨日みたいなことを言われるのでは、と思って言えなかった。こわい感じ。」fac.<こわい？>E子「何か言ったら予想できないことを聞かれて、うっとなる。」fac.<意外性があるというのは魅力的じゃない？(うーん)内田君は？彼もこわい？(いや、そんなことは)>A子「おなじようなことで悩んでいて、話しているときも、がんばれっ！って思う。」一同大笑いした。

fac.<昨日のB子さんの話しが中途半端になっているのが気になっているのと、皆のことが前よりは分かってきたので、外へ出るのもいいかと思う。どうするか？>B子の件は後で話すことにして、外に出ようということになり、外で何をするかについて色々な案が出た。結局、<散歩ぐらいなら。バスケや水泳と言われてもついていけない。>というfac.の意見が容れられて散歩に決定した。A子は足を骨折しているが、大丈夫だと。戸外では、はじめはばらばらに歩いていたが、そのうち輪になって賑やかに雑談(昔やった部活、映画、恋愛)を交わした。

・メンバーの魅力度平均=5.78 (SD=0.92)

・fac.の魅力度=5, co.の魅力度=5

●第4セッション 2日目 14時~17時

開始前、先に入って待っていると、皆がぞろぞろ入ってきて円座になり、A子の「輪を縮めよう」という言葉に円座が小さくなった。

冒頭にfac.<外に出て気分転換になってよかった。ただ、満足度にはばらつきがあったみたいだ。どうでした

か？>と問うと、「開放感があって、ここでは話せなかったことを話せてfac.にも近づけた感じ、部屋で話してばかりだときつからさっきのような時間がこの先もあれば」とA子ら。

fac.<D子さんはどうですか？>すると、D子は涙を流して、「なぜか分からないけど、この場にいることがきつい……自分が嫌」と、泣きながら、途切れ途切れに語った。彼女が口を開くのを待ち、時折質問を挟みつつ聴いていると、「周りの人に比べて、自分は言われたことを素直に受け入れたり、素直に出す事が出来ない。そんな自分が嫌だ。」そうしたD子に、他のメンバーは口々に助言や支持的な言葉を掛けた。

休憩を挟んで、沈黙。D子「話して、最初に感じていた嫌な気持ちが軽くなった。」co.<それを聞いて少し安心した。>fac.<……いいかな？一区切りついた？別の話に移っても？(はい)外へ出たときに心に残った言葉がある。F子さんの『愛は続くの？』という言葉。どうということかな？>F子の、どうしたら愛が長続きするのか？という問いに、fac.から順に、妻や恋人と出会ったきっかけと、長続きの秘訣を紹介した。皆に共通したのは「ケンカをしたり、嫌な気持ちになったときは、溜めないで素直に話し合うこと」というものであった。F子「それを参考に頑張る。」

・メンバーの魅力度平均=6.22 (SD=0.42)

・fac.の魅力度=6, co.の魅力度=6

●第5セッション 2日目 19時~22時

輪が真ん丸になって、グループが強固になったよう。fac.<B子さんの話が曖昧なまなのが気になっている。>B子「みんなの話を聞いていて、共通するところがあるような気がする。まずこのグループで自分のことを素直に言うことができれば」と。

第4セッションの続きで、言われたことを受け入れる(C子)、押し返す(D子)ことをめぐって話し合った。E子「私の中には、ここまでは、という線がある。」H子「納得したら受け入れるけど、納得しないと分かるまで聞く。」G子「小学生の頃いじめられたことがあって、不信感から人を避けていた。けど近頃は自分の意見を言えるようになった」とそれぞれが語った。その後、話題が次々に移り変わった。

休憩。部屋に戻ると皆寝そべって、笑い転げていた。しばしの沈黙。co.<ちょっと言いたいことがあるんだけど。>co.は、第4セッションでfac.がD子の話してからF子の話しに切り替えたことについていけなかったこと、それが言えなくて心残りがあったこと、そして今その心残りが心の中を大きく占めて、皆の話に集中できず申し訳なく思っている、といったことを語った。fac.<私のペースと内田君のペースが違ったのでは？内田君はメンバーの言葉が形成されて、それを口にするのを待つ方だ

から。スタンスの違いもあるのではないかと。>co.<そうかもしれない。>するとA子「私も休憩前は重たかった。私はひとつの話題をじっくり考えるのが好きだけど、コロコロ変わったから。」B子「私もきつくて最後はダレていた。」E子「私はいろんな人の話が聞けてよかった。」fac.<どうやらそれぞれ感じ方に違いがあるということがはっきりしてきたらしいですね。>

・メンバーの魅力度平均=5.88 (SD=0.31)

・fac.の魅力度=5.5, co.の魅力度=6

●第6セッション 3日目 9時~12時

D子「ここにいることがきつくはなくなったんですけど、先生たちはどうですか?ついていけない感じとか不安はまだありますか?」fac.<みなさん方のことが少しずつ分かってきて、近づいてきたのでそれは今はない。>co.<2日間話を聞いたりしているうちにみんなの輪郭が自分の中に出てきた気がする。不安や緊張は今はない。>fac.<D子さんはどうですか?私たち2人のことをどう思いますか?>D子「初めは11分の1と言われても、みんなは2年間一緒だけど、2人はそうじゃないから、話せない感じがあったけど、今はそんなことない。」

E子「これまでステーキのような話が続いたから、豆腐のようなこともしたいんですけど。」E子の提案に他メンバーも賛同し、スポーツがしたいがfac.はどう思うかと尋ねた。話し合った上でfac.も同意し、11名の総意でバドミントンと卓球をすることに。屋内で1時間ほどバドミントン。次は卓球かと思いきや、「結構疲れたので、後は部屋で話をするのもいいですか?」と。

部屋に戻ったが話は進まなかった。<ゲームのようなことをやりましょうか?>とfac.が提案した、11名それぞれに看護部長から婦長、学生までヒエラルキーをつくって、失敗すると席移動、看護部長を目指すというゲームはかなり盛り上がった。

・メンバーの魅力度平均=6.89 (SD=0.31)

・fac.の魅力度=5.5, co.の魅力度=5

●第7セッション 3日目 14時~17時

fac.<前回やらなかった卓球でもよろしいかと思いません。ただ、ポテトチップスの後はまた別のものを、ということで話も出来たら。>そしてfac.は持ち時間一人20分を自由に使うスポットライト方式を提案した。co.<まあ、一つの提案ということで、他に何かあればそれでもいいと思う。>結局他に案もなくそれを行うことになった。fac.<まずは私から>と家族のこと、気がかりなことを語った。それに対してみんなが質問やフィードバック。

次にfac.はA子を指名した。A子は「自分は積極的で見られるけれど実は小心なところもあるし、よく発言するけどそれがどう思われるかすごい気になったりもする。

自分がどう見られているか知りたい」と。A子の指名を受けて、C子「一年の頃はこの人に嫌われたらいけないと思っていた。」E子「A子さんはいつも怒っているような気がしていたけど、最近はそういうことはない。話を聞いて、変わろうと努力したのかなと思った」など、皆素直に語り、A子も正直に言ってもらったことを喜んだ。

A子からH子にバトンタッチ。H子は将来の夢について、あたたかい家庭を築きたい、母親に対して素直になれないところがあるので、素直になって親孝行をしたいと語った。そして彼女も自分がどう思われているか聞かせて欲しいと。B子「普段は違うグループで接する機会が少ないけど、近づきたいと思ってる。」E子「マイペースでむかつく時もあるけど、辛いことがあったときに涙を流してくれたことがある。」これにH子、E子、そしてA子も涙を流した。残り時間を使って卓球。チーム分けをして熱戦であった。

・メンバーの魅力度平均=7.00 (SD=0.00)

・fac.の魅力度=6, co.の魅力度=6

●第8セッション 3日目 19時~22時

前回に引き続いて、D子、B子、G子それぞれが、たどたどしくも率直に心情を吐露し、恐る恐る皆からのフィードバックを求めた。それぞれ日頃から思っていたことを率直に語り、みんなが真剣に耳を傾けていた。E子は、複雑な生い立ち、いじめられた体験を力強く、きっぱりと語った。それに触発されたF子は涙を流し、むせびながら、自分も同じようなことがあって、親や友だちのおかげで立ち直ったことを語った。メンバーはじっくりと彼女の言葉を待ち、耳を傾けていた。

さらにF子も怖いけど聞きたいと、フィードバックを求めた。接する機会が少なくあまり知らなかったけど、これからもっと話をして付き合っていきたいと口々に語った。付き合いの長いC子は涙を流して「胸に刺さることをよく言われて、少し距離を置いていたけど、今日F子さんの全く知らなかった面を知って、もっといい関係になるスタートラインによろしく今立った気がする」と。

・メンバーの魅力度平均=7.00 (SD=0.00)

・fac.の魅力度=6, co.の魅力度=6

●第9セッション 4日目 9時~11時

I子には、実習の時に支えになってくれた(D子)、寂しがり屋な所、強がりな所があるけど、いつも自分たちのことを気にかけてくれる(H子・E子)。

C子には、F子から「いつもやさしくしてもらっているのに、私はやさしくできない。エンカウンター・グループの前にギクシャクしたことがあって、初めはこのメンバーでやることに抵抗があったけど、正直に話し合えてよかった。これからも付き合っていきたい」と。F子も

C子も涙を流していた。最後に残った co.が家族への思いを話して、それに対してメンバー、fac.からフィードバックがあった。

残り15分というところで、fac.<いよいよ終わりですね。>A子「昨日の夜、みんな同じ部屋に一緒にいた。何を話すでもなくテレビを見て笑ったりしていたけど、何も話さなくてもとても安心感があった。」そして他のメンバーも、初めはファシリテーターの二人がいることで話しにくかったし、グループに来たくない、この3泊4日をどう乗り切ろうかと考えていたが、先生たちがずっとおなじ態度で聞いてくれるので、話せたとし、話したいと思った。今では二人と別れるのが寂しい、といった感想を述べた。H子「他のグループはスポーツとかして羨ましかったけど、私たちは話をしてからスポーツをしてよかった。最初は水泳!とか言っていたけど、やらなくて本当によかった。」E子「グループに来る前に、自分や人の好きなどころ、嫌いなところを言われると聞いて嫌だった。いきなり聞かされても、嫌なところを言われたらむかつくし、いいところを言われたって、どこまで私のことを知ってるの?って思う。それが結局、強制されてじゃなく、みんな自分のことを言うことになった。それがよかったと思う」と。最後にfac., co.からも、みなさんと一緒に本当によかったと感謝を述べて終了。

最後は全体会にて質問紙記入、まとめ、写真撮影を行った。

- ・メンバーの魅力度平均=7.00 (SD=0.00)
- ・fac.の魅力度=7, co.の魅力度=7
- ・メンバーの満足度平均=7.00 (SD=0.00)
- ・fac.の満足度=7, co.の満足度=7
- ・3ヶ月後のフォローアップ 自分にとっての有意意味度平均=6.00 (SD=0.87)

考 察

1. メンバーにとっての意義

安部(1984)は、青年期仲間集団のグループ体験における問題点として、①グループ体験への動機づけが多様であること、②既知集団として共有されている「みんな意識」と「擬仲間関係」の存在、③日常生活を通しての否定的側面に敏感である、という3点をあげた。そしてさらに、そのファシリテーションの要点として、①動機づけのためにメンバーの「ちがいを」明確にすること、②既知集団の中の異質なメンバーとして、メンバーの「みんな意識」と「擬仲間関係」を告発すること、③グループ体験の中に持ち込まれた日常関係に対して、仲介者として新しい仲間関係の獲得を援助すること、という3点をあげた。

本事例は、2年間を共に過ごした9名の学生と学外

の講師2名からなり、そこには初めから9対2の構図があった。冒頭の<ファシリテーターもグループの11分の1>というファシリテーターの発言は、ファシリテーターも「おなじ」グループの成員であるということ、そして同時に一人一人が独立した「ちがう」人間であるということをはっきりと宣言し、メンバーの「みんな意識」と9対2の構図に揺さぶりをかけるものであった。しかし、ファシリテーター2人を除いた「みんな」で話し合う(第1セッション、第3セッション)など、「みんな意識」は強固であった。メンバーの「みんな意識」は、ちがっても大丈夫であるという安心感が感じられない限り容易には変化しない強固なものなのであろう。

本事例においては、そうしたファシリテーターの働き掛けに加えて、「コ・ファシリテーター方式」という形式、すなわちファシリテーターが大学教員、コ・ファシリテーターが学生という構成自体に「ちがいが」明らかであったことも有効に働いた。さらにコ・ファシリテーターがファシリテーターの権威性に萎縮することなく自由に発言することを通して、両者の「ちがいが」提示された(特に第5セッション)ことは、ちがっても大丈夫であるというメンバーの安心感と、「みんな意識」に「私」が押し殺されることなく、ひとりひとりが自由に語るグループの風土を醸成することにつながった一つの要因と考えられる。「自分を表現できない」、「傷つけ傷つけられたくない」(第1セッション)メンバーであったが、否定的な側面を含めて「強制されてじゃなく、みんな自分のことを言うことになった」(E子、第9セッション)。そして、初めにあった9対2の構図から新しい関係、すなわちファシリテーターを含めてそれぞれが「ちがう」存在であることを許容しながら「おなじ」グループのメンバーとして場を共にする関係へと変化したといえよう。

そしてまた、「おなじようなことで悩んでいて」(A子、第3セッション)メンバーの身近に感じられるコ・ファシリテーターは、未熟であっても、メンバーとファシリテーターの仲介者的な役割を果たすことも可能である。このように、本方式はメンバーにとっても益するところが多く、意義深いものであるといえる。

2. ファシリテーターにとっての意義

「ちがいを」明確にしていく際、メンバー同士の「ちがいを」性急に指摘することは抵抗を生むことが予想される。しかしながら、「コ・ファシリテーター方式」ではさしあたりファシリテーター同士の「ちがいを」材料として取り扱い、モデルとなることで、「ちがいが」許容される雰囲気グループ内に生み、大きな抵抗を生じさせることなく、徐々に「ちがいを」明確にしていくことができよう。

また、ファシリテーターが単独で担当する場合に比べて、「コ・ファシリテーター方式」では、グループを観察する目が増えて、ファシリテーターがグループを複眼的に眺め、多面的に理解することが可能になる。そして、例えば、一方が介入するときには、他方がサポートにまわるといった、両者の「ちがいを活かしつつ、相補的な働き掛けを行うことも可能になる。このように、「コ・ファシリテーター方式」は、その構造と機能をグループの理解とファシリテーションに活かすことができるという点で、ファシリテーターにとってもメリットのある方法であるといえよう。

3. コ・ファシリテーターにとっての意義

筆者らは、ファシリテーター養成の過程を幾つかの段階に分けて実践している。すなわち、数回のエンカウンター・グループのメンバー経験を積んだ後に、本稿で取り上げた「コ・ファシリテーター方式」にてベテランのファシリテーターと組んでグループを実践する段階、さらに「ペア・ファシリテーター方式」(原賀, 2002)にて研修生同士で組んでグループを実践する段階、そして最後にファシリテーターとして単独で、あるいはコ・ファシリテーターと組んでグループを実践する段階である。このように段階的に経験を積んでいくことが研修生への負担を少なくし、訓練効果も期待できるわけであるが、とりわけメンバーからファシリテーターへの転換の段階となる「コ・ファシリテーター方式」の意義は大きい。

どれだけメンバーの経験を積んでも、やはりメンバーとして参加する場合とファシリテーターとして参加する場合とではグループに対する構えが随分と異なるものである。殊に初めてファシリテーターを務める場合には、特別な役割を担うことによる重圧と、技術や経験の乏しさから大きな不安や恐れを経験することが予想される。しかし、「コ・ファシリテーター方式」には、研修生が実際のグループをファシリテーターとして負担の少ない形で体験できること、さらにベテランのファシリテーターの技法や態度を目の当たりにして、それらを取り入れ、学習することができるという利点がある。その経験は、研修生がファシリテーターとしての役割に慣れ、その過度の不安や恐れを軽減し、後に独り立ちする際の糧となるであろう。

そしてまた、ファシリテーターから取り入れ、習い、まねるだけでなく、福田・野島(2002)も触れているように、ファシリテーターとしてのスタンスの「ちがいを認識することで自分を知り、自分であればどうするかを考え、自分の持ち味を活かしたファシリテーター像を築いていくことに役立つ、ということも重要な点である。他のファシリテーターとの「ちがいを認識し、許容することは、メンバー同士の「ちがいを許容することに

も通じるであろう。

4. 「コ・ファシリテーター方式」がうまく機能するための要件

最後に、「コ・ファシリテーター方式」がうまく機能するためには、コ・ファシリテーターが自由に発言できる関係性がファシリテーターとの間に築かれることが重要である。コ・ファシリテーターがファシリテーターの権威や支配性に萎縮し、従うばかりでは、ファシリテーターに呑み込まれてしまって「ちがいが活かされない。さらにそのようなファシリテーターとコ・ファシリテーターの関係性がメンバーに影響して、メンバーが萎縮し、自発性が損なわれる恐れもある。また、せっかく観察の目が増えても共有されなければ多面的な理解には結びつかないし、両者の動きが余りにちがえば、グループは混乱する。そうした事態を防ぎ、そしてコ・ファシリテーターのトレーニング効果を高めるためにも、事前の、そしてセッション前後のミーティングを十分に行って意志疎通を図ることが肝要である。

まとめ

本稿では「コ・ファシリテーター方式」によって実施されたベーシック・エンカウンター・グループの事例を呈示して、メンバー、ファシリテーター、そしてコ・ファシリテーターそれぞれにとっての本方式の意義を検討した。そして、ファシリテーター養成における本方式の意義が示され、さらにファシリテーターとコ・ファシリテーターの「ちがいがグループ・プロセスの理解とファシリテーションに活かされることが示唆された。今後は、他の方式との比較を通して、より広い視野から本方式を検討し、その「ちがいが問題性を明らかにした上で、ファシリテーターの養成方法をより一層洗練していくことが必要である。

付記

本稿は、日本人間性心理学会第21回大会(2002年9月20日、神戸女学院大学)にて口頭発表したものに加筆修正したものである。座長の労をおとり下さいました佐賀医科大学の村久保雅孝先生、会場にて貴重なコメントを頂きました諸先生方、そして本稿をまとめるにあたりご指導ご校閲を頂きました九州大学アドミッションセンターの吉良安之先生に深謝いたします。

引用文献

安部恒久(1984)：青年期仲間集団のファシリテーションに関する一考察、心理臨床学研究, 1(2), 63-72.

- 原賀一敏（2002）：ベーシック・エンカウンター・グループの「ペア・ファシリテーター体験」に関する事例研究的検討—「コ・ファシリテーター体験」との比較—。日本人間性心理学会第21回大会発表論文集, 126-127.
- 福田 麗・野島一彦（2002）：ベーシック・エンカウンター・グループの「コ・ファシリテーター体験」に関する事例研究的検討。九州大学心理学研究, 3, 167-174.
- 野島一彦（1985）：グループ・ファシリテーターの養成をめぐって。九州大学心理臨床研究, 4, 99-105.
- 野島一彦（1999）：グループ・アプローチへの招待。野島一彦編, 現代のエスプリ385, グループ・アプローチ, 至文堂, 5-13.
- 野島一彦・内田和夫（2001）：「コ・ファシリテーター方式」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み。九州大学心理学研究, 2, 43-52.